

ネガティブ・ケイパビリティと語り

医療法人財団はまゆう会新王子病院

○市丸喜一郎、末次顕宰、河野由季、中川悦子、妻鳥 舞、杉 昌宏
中山桂祐、大谷麻岐、椎葉奈緒美、「語りの会」

人は人生のどこかで自らの力ではどうしようもない空虚感に襲われても、黙って堪えていかなければならないことがある。

先般『ネガティブ・ケイパビリティ、答えの出ない事態に耐える力』（帯木蓬生著、2017）を拝読し、「語りの会」を始める動機となった「語りが医療を変える（クローズアップ現代、NHK）」と出会った時と同じような感銘を受けた。それは、今後「語りの会」をどのように続けていくかについて恰好の考えに思え、著者のネガティブ・ケイパビリティ（NC）なる考え方を想像しながら、これからの「語りの会」の意味を探るとともに、透析患者の語り集『浜風に吹かれたハマユウの花たち』発刊の感想を語ってみたい。

NC とは、どうしても答えの出ない、どうしても対処しようのない事態に耐える能力を意味するとともに、それは共感とか相手を思い遣る心、探求者が結論を棚上げる創造的な能力を持ち、相手の思いを想像することで共感に至る道のようなものである。いわば生き様の了解心理学とも言える NC の考え方は、物語的医療の要となる病に寄り添う共感のことであり、私共が「語りの会」で探し求めてきた道に相通じるもので、継続する意思をしなやかにしてくれる考えでもあった。

透析患者の語り集発刊に際して、語り手はそれぞれの人生の物語をいかに文章化するかを腐心されていたが、語りの本質はあくまで NC の考えに支えられた語りの現場にあると考えている。